

研究計画概要書

研究課題名	がん患者の家族の予期悲嘆に対する緩和ケア病棟における看護支援とターミナルケア態度との関連性
研究責任者	名古屋大学医学部保健学科看護学専攻臨床看護学講座 教授 安藤 詳子
研究分担者 (所属・職名・氏名)	名古屋大学医学部保健学科看護学専攻 4年 林 里桂
共同研究者 (所属・職名・氏名)	該当なし
研究事務局 (機関の名称・住所・連絡先)	名古屋大学大学院医学研究科 看護学専攻 安藤研究室 住所:名古屋市中区大幸南1丁目1番20号 連絡先:052-719-1553
研究の意義・目的	<p>〈意義〉</p> <p>我が国においてがんは死因の第1位であり、日本人はがんによる死別を多く経験している。がんと診断された時から、がん患者の家族は幾つかの局面において予期悲嘆を経験している。先行研究(新藤さえ氏, 2018年)において、緩和ケア病棟看護師はがん患者の死が避けられないと知った家族の予期悲嘆に対し5つの支援「家族と患者の関係性を強める支援」「家族が看取りに際し十分にお別れできるような支援」「家族の予期悲嘆を考慮し、環境を整え傾聴して関わる支援」「家族を気遣い安心感と信頼をもたらす支援」「家族自身のための時間を大切に、患者とともに過ごせるような支援」の構造を持つことが明らかになっている。しかし、これらの支援とターミナルケア態度との関連性は明らかになっていない。そこで、今回はそれらの関連性を分析し、考察したい。</p> <p>〈目的〉</p> <p>緩和ケア病棟におけるがん患者の家族の予期悲嘆の対する支援と、ターミナルケアに対する態度との関連性を明らかにする。</p>
分析の対象	東海地域にある18緩和ケア病棟に所属する看護師250名分を回収し、そのうち有効回答239名のデータを分析の対象とする。
実施計画	<p>研究代表者である安藤詳子氏のもと、本学大学院博士前期過程在学中であった新藤さえ氏が平成30年に実施した「がん患者の家族の予期悲嘆に対する緩和ケア病棟における看護支援の構造」(倫理審査番号:15-145)のデータの一部を用いて分析する。上記研究の概要と情報利用の手続きについては以下の通りである。</p> <p>「既存調査の概要」</p> <p>対象者は東海地域にある緩和ケア病棟に所属する看護師である。調査方法は東海地域の緩和ケア病棟を有する28病院をリストアップし、病院長及び看護部長に文書により調査を依頼した。同意を得られた病院の18緩和ケア</p>

	<p>病棟看護師長に調査票を発送し、看護師 296 名へ配布を依頼した。調査項目は、対象者の背景（性別、年齢、最終学歴、看護師通算経験年数、緩和ケア病棟勤務歴、職種、取得資格、研修会参加状況、重要他者との死別経験の有無）、Nakazawa らが開発した「緩和ケアに関する医療者の態度評価尺度」18 項目、自作の「がん患者の家族の予期悲嘆に対する看護支援」33 項目を評価した。インフォームド・コンセントについては対象者に文書にて、研究の目的、方法、研究参加の任意性とそれに伴う不利益は生じないこと、結果の公表、匿名性の確保などを説明し、質問紙の返信をもって同意とした。データの匿名化については調査票は無記名であり、研究期間中は鍵のついたデスクにて厳重に保管し、研究終了後に破棄処分を行った。</p> <p>「本研究での既存情報利用の手続き」</p> <p>既存調査の全対象者を本研究の対象者とする。調査項目は対象者の背景（年齢、性別、経験年数など）・がん患者の家族の予期悲嘆に対する看護支援・ターミナルケア態度尺度を評価する。データ提供の手順についてはインフォームド・コンセントを参照、データ管理の手順については個人情報の保護の方法を参照。</p> <p>【分析方法】</p> <p>がん患者の予期悲嘆に対する緩和ケア病棟におけるケアと、ターミナルケア態度尺度を集計し、カイ 2 乗検定、T 検定、分散分析を用いて関連要因を分析する。</p>
研究期間	実施承認日から令和 2 年 3 月 31 日まで
被験者などに対するインフォームド・コンセント	研究代表者である安藤詳子氏のもと、本学大学院博士前期過程在学中であった新藤さえ氏が調査した匿名化された既存情報を用いる研究であり、個人を特定できず拒否機会を保障できないため、研究情報の公開のみ行う。情報公開は研究計画概要書を「保健学臨床・疫学審査委員会」ホームページに掲載して行う。
個人情報の保護の方法	使用するデータは、研究代表者である安藤詳子氏のもと、本学大学院博士前期過程に在学していた新藤さえ氏の研究にて収集された既存データで、両者の承認を得た。研究期間中は名古屋大学大学院医学系研究科の安藤研究室（本館 1 階 101 号室緩和ケアラボ）の専用の鍵付きキャビネットに保管し、研究終了後 10 年間保管して、その後紙媒体はシュレッダーにかけ、CD 等は破砕して復元できないように完全に消去する。情報は厳重に管理し、研究以外には使用しない。卒論発表会などの研究成果の公開時には、対象施設などの公開は行わない。